



説教要旨 「ちっぽけな解放宣言」

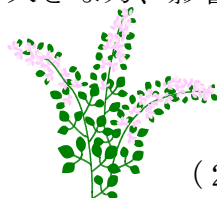
ルカによる福音書 13章 10～21節

イエス様はこの個所で、安息日が神様による解放の恵みを記念するための日であることを教えておられます。申命記第5章12節以下には、神様がエジプトの奴隷状態から解放して下さった恵みを覚え、その恵みに応えて生きるために、自分の下にいる奴隷や家畜にも、安息を与え、解放の恵みを共に喜ぶために安息日が定められていることが記されています。安息日に家畜を解いてやって水を飲ませるのもそのためです。ですから、イスラエルの一員であるこの女性を十八年に及ぶ苦しみから解放することは、解放の記念日であるこの日、安息日にこそ相応しいことなのです。

そしてイエス様は神の国をからし種とパン種にたとえて語られて締めくくります。からし種は、粉のように小さな種です。小さなからし種でも、それが蒔かれ、芽を出し、成長していくと、やがて空の鳥が巣を作るような大きな木になる。神の国、神の支配、私たちの救いも、最初はちっぽけな、あるのかわからないのか分らないようなものでも、やがて大きな、誰の目にも明らかな現実となるのです。パン種はパン生地を発酵させる酵母です。ほんの僅かな量の酵母が混ぜられることによって、パン全体が大きな影響を受けるのです。

イエス様はご自分の語られる解放の宣言を、からし種やパン種のようにちっぽけなものであると言われているのです。この時イエス様がなされたことは、小さな町の会堂で「あなたがたは解放された」と語り、1人の女性の病を癒しただけのことです。しかし、このちっぽけな解放宣言こそが、やがて神の国をもたらすのです。

礼拝において告げられるイエス様による解放の宣言、罪の赦しの恵みはほんの僅かな、何の力もない、私たちの現実を変える力などないように思われるかもしれませんが、けれども、このパン種が混ぜられると、やがて全体が膨れていくのです。イエス様による解放の宣言は、私たちの歩みに、人生に、神様と隣人との関係に、やがて大きな力、影響力を発揮し、その全体を変えていくのです。



(2019・9・15 説教者：稲垣真実)